



フランス文学研究室 NEWS

平成 28 年 3 月 25 日
第 4 号

この号の内容

- 1 刊行の辞
- 2 イベント報告
- 3 在学学生数
- 4 卒業生進路
- 5 学部生の声 1
- 6 学部生の声 2
- 7 ことばあそび
- 8 就職活動記
- 9 大学院生の声
- 10 留学記
- 11 卒業生より
- 12 編集後記
- 13 ホームページ紹介

刊行の辞

フランス文学研究室 NEWS も 4 年目、執筆者も入れ替わり、伝統とまでは言わなくとも先輩から引き継ぐものとしてそれなりに定着した気がします。私が専修決定した頃にはこういったものがまだ無かったので、オリエンテーションで配布された、年度毎の新入生の人数や卒業修了生の進路別人数の一覧表が、厳然たるメカニズムという感じで何だか恐ろしかったのを覚えています。しかし今は新入生の方にもこれを読んでいただければ、それぞれ紆余曲折あった末の就職〇名であることや、進学・留学で感じられる世界も様々であることを感じて、この研究室から安心して挑戦する意欲を持っていただけるのではないかと思います。また OBOG の皆様には、相変わらず仏文研究室には若々しい真面目さを持った学部生が入ってきてくれていることが伝わるのではないのでしょうか（今年度は 1 名と少なかったですが、来年度は増えるようです）。文学部の一学生としては、個別の人間が言葉を選んで書いた文章というのは、作品を目指したものでなくともやはり面白い、という感想につきます。皆様にも楽しく読んでいただけることを願います。

(修士 1 年 土門さやか)

イベント報告

2016 年 3 月 20 日 ヤン・メヴェル先生企画セミナー

« Le Théâtre beckettien, la respiration et le point de vue de Sirius »

2016 年 2 月 6 日 就職講演会

2015 年 12 月 21～25 日 木田剛先生集中講義 「フランスのことばと社会」

2015 年 12 月 17 日 エステル・ドゥーデ先生講演会

「地域遺産の考古学と再生：中世フランス演劇の例」

2015 年 9 月 27 日 黒岩卓先生授業関連企画

「ヴィオール・コンソールと歌うフランス語訳詩篇歌」

2015 年 7 月 23～31 日 小林文生先生集中講義 「プルースト研究」

在学学生数

博士後期課程 4 名

博士前期課程 7 名

学部 2～4 年 11 名

平成 27 年度卒業生進路

就職

エノテカ株式会社

神奈川県庁

株式会社バイオテック

レンゴー株式会社

学部生の声 1 「あと 1 年、新鮮な気持ちで」

「赤ずきん」と聞くと誰もが話の内容をだいたい細かく思い浮かべられるだろうが、「長靴をはいた猫」や「青ひげ」になると、タイトルに聞き覚えはあるけれども内容までは分からない、という方も多いのではないだろうか。これらはみな、シャルル・ペローが編集したお話である。私は短い中でも何か多くの示唆を含んでいそうな物語が大好きで、卒業論文執筆に向けて少し調べたりもしていたが、その過程でそれまで考えもしなかった疑問がたくさん浮かび、いかに自分が今まで「知ったつもり」になっていたかを痛感させられた。もともと民間伝承や他国の物語の中に似通った話があり、それをペローが、登場人物に赤ずきんや長靴を着せたり、内容を少し変えたりしてまとめたのであろうが、結局話の出どころはどこなのか。どうして日本では児童文学として受容されたのか。そもそも児童文学の定義とはなんなのか。考えてみればキリが無い。

文学に限った話ではない。メーカーについて企業研究してみると、買い物の時にそれまで全く気にもしなかった商品のメーカーが気になり始めることもあり、また新しい交友関係ができれば話題に上がることも違ってきて、これまで気になっていなかったことに興味を持ち始めたりすることもあった。大小問わず、新しいことをやってみることは自分自身の成長の糧になると思っている。学生生活も残すところ 1 年であるが、卒論研究にもそれ以外のことにも自分で勝手に視野を狭めず、旺盛な好奇心を持って取り組んでいきたい。

(学部 3 年 出口武志)

学部生の声 2 「出会い」

この大学に入ってから、もう少しで三年が経とうとしています。私はこの三年間で、本当にたくさんの方と出会ってきました。学部の同級生、部活の仲間、フランス文学研究室の方々、バイト先の方々。私は部活ばかりの大学生活を送ってきたので、部活関係の人が多いかもかもしれません。同じ部活をやっている他大学の人たちや、ずっと年の離れたOB・OGさん方ともたくさんお会いしてきました。

新しい人と出会うのはとても楽しく、わくわくすることです。世界は広いのだと感じさせてくれます。その人の数だけ考え方があって、私が今まで思いつきもしなかったようなアイデアや、ものの視点を教えてくれるのです。ただ最近には、世間は狭いと感じることも増えました。新しく出会った人と私のあいだに、思いがけず共通の知人がいたときです。そんなときは、いきなりお互いのことがわかったような気がしてとても嬉しくなります。出会った人と仲良くなるのはとても素敵なことです。会って話をするたびに、どんどんその人の人柄が見えていって、新しい発見をすることもあります。そうすると自分の考えも深まって、世界が広がっていくような気がするのです。大学生にもなると子供の頃のように簡単に自分をさらけ出すのは難しいですが、だからこそ成人したらお酒を飲んでもいいとされているのではないかと思います。どなたか、美味しいお酒を知っていたら是非教えてください。

少し話がそれてしまいましたが、私の大学生活も残り一年となりました。そのあいだにどんな出会いがあるのか、今から楽しみです。
(学部3年 久保友梨恵)

ことばあそび 「優美な屍骸 cadavre exquis」

La pierre magnifique signe l'endroit correct.

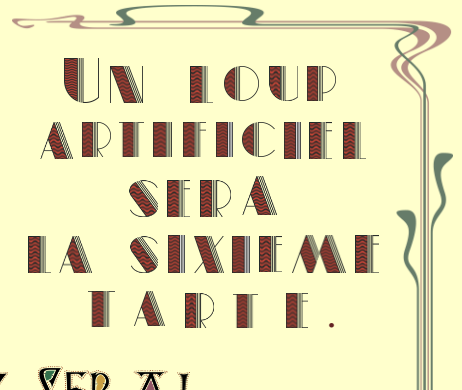
醜い鉛筆がどこかクラムチャウダーを思い出す。

L'arbre symbolique rétrécit les choix rêches.

怖い蓄音機がぎゅっと柴犬を変える。

愛しい手品師がうつらうつら正露丸に聞き入った。

白い豊満が
愛らしいペンギンを
捨てた。



LE PAMPLEMOUSSE PARESSEUX SERA LA LUMIERE PRINTANIERE.

Les lettres pointues cernaient l'odorat mou.

La maladie infernale obéit à la paternité joyeuse.

La ruine moderne aborderait l'ours hebdomadaire.

Le livre phosphorescent s'excuse de la nationalité cacophonique.

青白いサンダルが耳打ちの菜の花を歩く。

L'eau confuse brille de la vanité naïve.

可愛いスカーフがわずらわしい飛行機を洗い落とす。

Les saisons carrées sentent l'antithèse cafardeuse.

UN CHAT LOISANT PATINAIT SUR L'EXCLUSION GENEREUSE.

私の就職活動記

私の就職活動は、他の就活生が艱難辛苦の末掴んだ栄光とは少し違った形で幕を閉じた。そのため立派なことは書けないが、後輩の皆さんには反面教師として、先輩方、同期、先生方には改めてご報告として、自分には四月からの覚悟として、書き残したいと思う。

就活を振り返ると、私に最も足りなかったのは自己分析であった。先輩方が口を揃えて「何か軸を据えて就活をするべき」と言うが、これは真実だ。そしてその「軸」は、自己分析により明らかとなる。私はいつも二次面接止まりだった。書類は読める程度には書け、集団面接では選ばれる程度にはステップアップ出来るが、少し自分に踏み込まれた時点で振り落とされた。理解しているのにどうしてもぶれ続ける軸を持って余しているうちに、一つ内定を頂いた。そこで一旦、就活を辞めることにした。肩の荷が下り、解放感を味わったのも束の間、モヤモヤした気持ちを拭えずに二か月が経った。皮肉なことに、その気持ちと向き合うことで私は自己分析をし、ようやくしっかりした軸を見つけることが出来たのだ。そしてそのタイミングで、大手メーカーのOBの紹介を受け、本気で選考に取り組んだ会社の内定を頂くことが出来た。

結果的にはチャンスに食らいつき、物にしたと言えれば聞こえはいいが、きっと四月からは周囲への劣等感と戦うことになるのだろう。しかし入社すれば同じスタートラインに立つのだ。誇りと覚悟を持って、社会人としての一步を踏み出そう。

(学部4年 田中華奈)

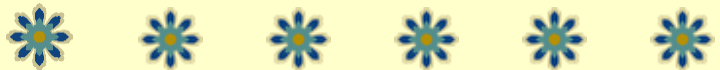
大学院生の声

私も7年前は高校生だったのに、ずいぶんと違う生き物になってしまった。

「教えている自分の方が生徒からたくさんのことを教わりました」。なんとありきたりな文句だろうと思う反面、それ以上に適切な表現が見つからない。この1年間、高校で非常勤講師としてフランス語を教え、授業以外の指導にも数多く携わらせていただいた。何度も悩み、何度も人前に立つことが怖くなった。精神的にも物理的にも老け込んだような気がする。しかし、生徒達とふれあうなかで、幾度となく若返らせてもらった。

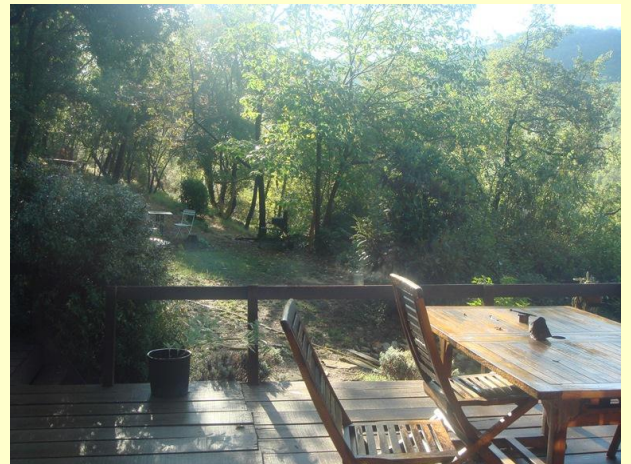
10月にフランス語スケッチコンクールという、文字通りフランス語で書かれた寸劇を演じるコンクールがあったのだが、私はこれに出す生徒4人の指導を任された。テキストは高校生で習う文法で解釈するには難解で、そもそも私に演技の指導経験などあるはずもなく、正直どう指導していいか途方に暮れていた。しかし、生徒達はやる気まんまんで、意味のよく分かっていない台詞（彼らにとっては何かの呪文のように思えるだろう）も根性ですぐに頭に叩き込んできた。発音やリズムを訂正すれば、すっと身につく。一緒に身振りや表情などを肉付けしていても、豊かな発想で次々とアイデアが湧く。何より、彼らは見返りがなくても目の前のことに一生懸命になれるのだ。私もそうだったのに。連日、日ごととっぷりと暮れるまで練習を重ね、たくさん話し合いたくさん笑い、私も青春時代に戻ったような心地だった。コンクール当日、手に汗握って緊張している私を尻目に、彼らは会場で一番の笑いと拍手を受けていた。損得計算なしに素直に全力になれること。とてもまぶしかった。何か新しいことに挑戦してみたくなった。

(修士1年 武政明日香)



留学記 「大陸の行き止まり，フランス生活の始まり」

アフガニスタンから歩いてこの地へ着いた青年とは、彼も私もフランス語では無口であるからテラスで無言のまま一緒にたばこを吸った。シエラリオネからギリシャへの密航を経てたどり着いた青年は、英語で私にキリスト教の教えを夜更けまで説いた。ギニアから来た敬虔なイスラム教徒である少年はラマダン中、日が落ちるまで何も口にしないので皆で夕食を空腹に耐えながら待った（南フランスの夏の落陽は遅い）。アルジェリアの彼の携帯は引切り無しに鳴り、その都度悲しそうに「Je t'aime」と嘘をつくのが聞こえた。黒猫は何も知らないのか、すべて承知しているのか、取りつく島もなくソファと同一化を試みる私の膝の上で丸くなっている。



▲ 「小世界」のテラス。緑と太陽とパスティスとタバコの匂い。ここから始まり、ここで休み、ここからまた旅立ちます。



◀ 「言葉」が通じないフランス生活初期からの無口な友達。

そこには様々な文化、宗教、言語、アクセント、それぞれの過去や今や希望や絶望があった。小さな、日本では出会ったことのない「世界」があった。そしてそれは確かにフランスの山奥にあった。

フランス人に囲まれ、フランスの生活様式を内包し、フランス人のようにフランス語を自在に操ることが「成功する留学」であると思っていた。それもたぶん間違いではないのだが、フランス生活と言われ私が真っ先に思い出すこの情景はこのように、そのどれにも当てはまらないものである。

私のフランス生活はこの「小世界」から始まった。宿主は「フランスは大陸の行き止まり」という。祖国から逃れヨーロッパへ、もっと、もっと遠くへ、と歩を進めるとフランスへたどり着くのだ。暴力も貧困も圧制もない日本から来た私は、何から逃れてきたのだろうか。考えていると、また皆に厄介払いされた黒猫が私の膝に逃げ込んできた。

(博士1年 矢野禎子)



卒業生より

早稲田大学の大学院に進学したのは、刺激を求めてのことだった。同じ専門の教授のもとに行くよりも、私が求めていたのはむしろ、雑多な人々からの刺激だった（ツイッターで、様々なツイートが不可避免的に流れてくる感覚）。その意味で、早稲田や他大学（東大駒場、慶応、学習院など）の人々の発表を聴いたり、未熟者同士が熱く文学や人文知の未来について語り合った時間が最も貴重だった。また、指導教官の教授とは専門こそ違えど、20世紀の文学研究における、やや究極主義的なベクトルとは違った語り口を、どう見つけるのかという関心を共有できたと一方的に思っている。周りを見ると、もちろん自分と同じ専門の教授につく人もいるが、基本的には自分の大学に所属しながら、その教授の授業やゼミに参加する形が多い。さらに早稲田は地の利があるので、様々な催し（研究会、映画、観劇など）に参加しやすい。めまぐるしい刺激の中で自問自答しながら、修士一年の終わりごろに、自分の語り口を決めることができた。

周りの学生たちを見ていると、多くの人に共通しているのは、発言を好むことと、様々なジャンルの本を多読すること。私も「あだこうだ」発言して痛目にあったこともあれば、そのおかげで知らなかった研究者や作家の存在を教してもらったこともある。それは自分の専門とは直接の関係はないが、今でも自分にとって決定的な情報であったりする。このような雑多な出会いは東京の利点なのかもしれない。

一方で、早稲田は休日の図書館の閉館時間が東北大に比べて早く、人が多いので資料が借りられないなどの不便もあった（早稲田は慶応などの私大と提携しており、資料の貸し出しはできないが閲覧は可能。私はこれにかなり助けられた）。また、様々な刺激は独自性の希薄化や、誘惑にもなりやすい（笑）。落ち着いた研究に向いているジャンルならば、東北大のほうが良いかもしれない。いずれにせよ、多ジャンルを多読することや、自分のアイデアを発言し合うことは東北大でも十分可能。研究には身も心も「移動」してみることが大事だと思っているが、自分の興味・関心と照らし合わせて今後の「移動」を決めて下さい。未来の修士生の参考になることを願いつつ、ここで筆を擱きます。

（フランス文学専修卒）

編集後記

杜の都に spleen の吹き荒れる季節もいつしか過ぎゆき、枯れ草の間に若葉萌ゆる候となりました。「萌」の字といえ、くさかんむりに日と月を書きますが、映画『太陽と月に背いて』ではランボーに扮したディカプリオが、悲願のオスカー（主演男優賞）を獲得しましたね。そんな今年も、なんとか第4号を刊行するに至りました。研究室の皆様には、あらゆる面においてご協力を賜り、深く感謝しております。そして、それぞれに味わい深い玉稿を寄せて下さった6名の方々へ、伏して御礼申し上げます。一体、書かれた言葉というのは、現実の会話ではありえない性質の、魂の触れ合いの感覚をもたらせてくれるのです。社交の顔の裏に隠れた、純真にして複雑な魂のひとつかげらずつを、めいめいの文章に読み取ることができます。

なんといいってもお騒がせしたのは、2面「優美な屍骸」の協力依頼でありましょう。これはシュールレアリスムの詩人・画家たちに流行した遊びで、日本の、いつ、どこで、だれが、なにをした、のゲームに相当します。「日本語の名詞を5つ、フランス語の形容詞を5つ書いて返信下さい」といった、迷惑極まりない電子書簡を皆様に送り、頂いた言葉たちを、予め作っていた表に機械的に当てはめ、多くの文を得ました。メンバーの豊かな語彙力のお陰で、予想をはるかに上回る面白い結果となり、全てを掲載できないのが残念です。偶然の産物が不思議とゆるやかに意味をなし、奇妙なイメージの連鎖は想像を刺激してくれます。今回は集客の不徹底で、本来のように数人が顔を突き合わせて遊ぶことは叶いませんでしたが、この単語は研究室の誰が書いたのか、全くわからないのも楽しいでしょう。

一部の方が打ち明けて下さったように、咄嗟に単語を出すことは、裸体をあらわにすることに似ている。複数人で一文をなすことすなわち言葉の交りは、言葉以上のものの交りである。高雅に感ぜられるが、極めて淫靡なる興奮を秘めたお遊戯であります。文学は淫靡なのです。……ひそやかに、大真面目に、こうした文学（研究）の営みに携わることの幸せを改めて思います。（アブサンを飲んでないのに、こんな酔ってる長文・駄文を記した非礼を詫びたい 修士1年 玉田優花子）



▲ 10月、研究室のメンバーで秋保温泉へ。

フランス文学研究室ホームページ

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

昨年11月、苦勞の末、上記ホームページを大幅にリニューアルし、デザインも内容も洗練されたものになりました。特に、新たに設けた学生のエッセー欄には、2名の方にお寄せいただいた心と文章が掲載されています。多くの情報を随時更新しておりますので、是非覗いてみてください。

「フランス文学研究室 NEWS」に関するご意見・ご要望は、以下の宛先までお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973

Email : hiver2homme7@gmail.com